令和５年６月１４日(水)

無欲は怠惰の基である。/渋沢栄一（しぶさわえいいち）

2024 年度に一新される新１万円札に採用される人物は、渋沢栄一です。2021 年大河ドラマ『青天を衝け（せいてんをつけ）』の主人公でもありました。

民間の力が弱かった時代に「もっと社会を良いものにしたい」という一心で、現みずほ銀行をはじめ数多くの企業を設立しました。その功績から、日本資本主義の父と称されています。しかし、渋沢栄一は、順風満帆の人生だったわけではありません。大きな時代の変化によって、何度となくキャリアの変更を余儀なくされ、四度目の正直でようやく自分が求めていることにたどり着くことができました。

最初の挫折は、もともとは尊王攘夷派の志士だったのに、若気の至りのクーデターに失敗して徳川慶喜に仕えることになったことです。

次に、徳川慶喜に仕える第二のキャリアがスタートしたと思ったら、大政奉還でそこから先が望めなくなりました。

そして、明治政府で第三のキャリアがスタートし、大蔵省のナンバー２まで上り詰めましたが、トップとぶつかって大蔵省を辞めてしまいました。

特別に能力が高いからとか、恵まれた環境にあったからとか、いろいろな意見はあると思いますが、渋沢栄一が度重なる挫折にもかかわらず、生涯をかけて 500 社もの会社を立ち上げ、日本の経済力を高めることに貢献できたのは、未来を信じることができたからです。そして、それとともに自分の夢をあきらめなかったからだと思います。

この「無欲は怠惰の基である」ということばには「欲が無いのは、今の現状に何の課題を見出さず、ただ受け入れている状態だ」という思いが込められています。渋沢栄一が求めている欲は、世の中をもっと良いものにしたいという、より良い社会の実現に対する社会的欲求です。渋沢栄一は、それを率先垂範しました。官尊民卑の傾向が強かった世の中で、民間の力をより強いものにするため、これからの日本の成長に必要な会社を次々に立ち上げていき、日本の近代化に大きく貢献しました。